新河岸川のあらまし（8）

天田　眞

志木市で柳瀬川と合流

志木では、新河岸川流域で長さも水量も流域面積も最大の支川である柳瀬川が合流します。柳瀬川は新河岸川と対照的な性格で、新河岸川は勾配が緩く流速は遅く、河床は泥質で水は濁っていますが、柳瀬川は勾配が急で流速が速く、河床が砂礫で水は澄んでいます。しかし、水質を調査してみると多くの項目で新河岸川の方がきれいな結果が出ています。（詳しくはエコシティ志木通信、毎年９月号の水質調査報告を参照）

洪水時の水量は、新河岸川が上流の渋井水門⇒新河岸川放水路⇒びん沼川⇒南畑排水機場で荒川に放流するので、結果的に柳瀬川の方が多くなっています。

合流点付近の歴史

合流点付近は歴史的にも流域で最も重要な場所で、奥州街道が新河岸川と交差したところに**引又河岸**が開かれ、陸と川の交通の交差点となり大いに栄えました。ここには野火止用水の末流を宗岡方面に通す**いろは樋**もありました。昭和初期竣工の改修工事で合流点の位置が変わってしまい、河岸場があったところが現在では柳瀬川に面しています。改修工事で水位が下がった川に船を通すため堰を設け、堰の上流と下流を結び船を上げ下げするための**宗岡閘門**がいろは橋の下流約 100 mのところにありました。

三代の堤防

合流点の左岸側には、江戸時代以来の三代の堤防が並行して現存しています。いろは橋から下流に向かい、最も左が江戸時代の**惣囲堤**、真ん中が平成時代初めに築造した現在の堤防、右側の流れに接したものが昭和初期の改修工事で造られた堤防。3 本がそろっていることで各時代の治水手法の変遷が分かります。

荒川の水と交差する

新宮戸橋の上流左岸側には荒川の秋ヶ瀬取水堰で取水した水の沈砂池があり、その水は新河岸川の下をくぐって朝霞浄水場・東村山浄水場などに送られています。また、一部の水は隅田川（新河岸川の下流）の浄化用水として、新宮戸橋下流の左岸から新河岸川に流入しています。かつて大変汚れていた隅田川を希釈するために 1964（昭和 39）年に秋ヶ瀬取水堰が稼働したときから流されています。

宗岡閘門を描いたいろは橋欄干のレリーフ

平成の堤防（左）と昭和の堤防（右）

宗岡村をぐるりと囲んだ江戸時代の惣囲堤